

中国電影大観



トゥヤーの結婚 (图雅的婚事／TUYA'S MARRIAGE)

2008(平成20)年1月24日鑑賞<松竹試写室>

監督・脚本＝ワン・チュアンアン王全安／脚本＝ルン・ウェイ芦葦／出演＝ユン・カン余男／バー・タル蘇合巴特爾／セン・グー森格（ワコー、グアパ・グアポ配給／2006年中国映画／96分）

……チャン・イーモウ張藝謀監督の『紅いコーリャン』（87年）に続いて、19年ぶりにベルリン国際映画祭の金熊賞をもたらしたのがこの映画！ 内モンゴル自治区の砂漠化、水不足、貧しさの中、トゥヤーが下した決断は下半身不随の夫との離婚と子連れでの再婚だが、それは一体なぜ……？ かぐや姫レース（？）では本命と穴馬を含むさまざまな男が登場し、面白い人間模様が展開されるので注目！ さて、トゥヤーの再婚の幸せ度を、あなたはどのよう評価……？

19年後、再び金熊賞が中国映画に！

チャン・イーモウ張藝謀監督の『紅いコーリャン』（87年）がベルリン国際映画祭で金熊賞を受賞したのは1988年のこと。それから19年後の2007年、再び金熊賞が中国映画に輝いた。それが、ワン・チュアンアン王全安監督の『トゥヤーの結婚』。私が『紅いコーリャン』を観たのは2004年の「中国映画の全貌2004」においてだったし、そこから私の中国映画熱が始まっていったが、さて『トゥヤーの結婚』は……？

2007年11月3日に観た『白い馬の季節』（05年）は内モンゴルを舞台とした映画だったから、この映画も『白い馬の季節』のような、砂漠化し、遊牧民の生活が成り立たなくなっている現状を社会問題として提起したものかなと思ったが、そのタイトルから考えると恋愛モノかなとも思えるもの。さて、その実態は……？ そして、なぜベルリン国際映画祭で金熊賞を受賞するほど評価されたの……？

第6章

手法・テーマで様々な実験

ワン・チュアンアン 王 全 安監督のミューズは第3の……？

プレスシートによると、1965年生まれの王 全 安監督は、「北京電影学院を卒業後、西安映画スタジオに配属。数々の脚本を書き、2000年には、デビュー作『月蝕』が、フランス、ロシアをはじめとする世界の国際映画祭で注目を集めた」とのこと。しかし残念ながら、私はこの『月蝕』も第2作目の『驚蟄』も観ていないから、そもそも王 全 安監督の名前すら知らなかった。

また、「ワン・チュアンアン（王全安）監督の『月蝕』、『驚蟄』に主演し、中国国内だけでなく、パリ国際映画祭などで主演女優賞を受賞するなど、その美しさと演技力は、国際的にも高い評価を受けている」という余 男ユー・ナンも今回はじめて聞く女優の名前で、これまで全然知らなかった。ましてや、『マトリックス』のウォシャウスキー兄弟最新作『スピード・レーサー』（08）に、香港の有名女優舒 淇スー・チーや韓国実力派女優チョン・ドヨンチョン・ドヨンを押しつけて大抜擢され出演が決定した」ことも全然知らなかった。

張 藝 謀監督の初期のミューズは鞏 俐ゴン・リーだったし、台湾の蔡 明 亮監督のミューズは一貫して陳 湘 琪チェン・シャンチーだが、『月蝕』『驚蟄』に続いてこの『トゥーヤの結婚』にも主演している余 男ユー・ナンは、まさに王 全 安監督のミューズ。中国では四大女優として章 子 怡チャン・イーモウ、徐 静 蕾シュー・ジンレイ、周 迅ジョウ・シュン、趙 薇ヴィッキー・チャオが有名だが、果たしてプレスシートが書いているように、この余 男ユー・ナンが鞏 俐ゴン・リー、章 子 怡チャン・イーモウに続く第3の中国出身の国際女優となるのだろうか……？

私はこの映画のすばらしさは認めるものの、その点に関しては若干疑問がある。なぜなら、1978年に中国遼寧省で生まれ、1995年に北京電影学院に入学したという余 男ユー・ナンは、鞏 俐ゴン・リーや章 子 怡チャン・イーモウほどの輝くような美人とは思えないから……。

水汲みの大変さと井戸掘りの重要性

中国映画では『黄色い大地』（84年）をはじめとして、何 km も離れたところに毎日水汲みに行くのが日課となっているシーンがよく登場する（『シネマルーム 5』63頁参照）。また、中国山西省の太行山脈の寒村のような水の少ない地方では、井戸を掘ることはすごい重要事となるから、何代にもわたって井戸掘りに執念を燃やす村人たちの姿を描いた『古井戸』（87年）のような映画が、説得力をもって迫ってくる（『シネマルーム 5』79頁参照）。

水不足という点では内モンゴル自治区は山西省以上（？）だから、水汲みの大変さと井戸掘りの重要性は山西省以上……？

トゥヤー（余男^{ユー・ナン}）は10km 以上離れた井戸までらくだを引いて水を汲みに行き、また羊たちの世話を1人でしているが、夫バートル（蘇合巴特爾^{バートル}）は子供と遊んでいるだけ。もっともそれは、バートルがグータラ亭主だからというわけではなく、井戸掘りの作業中ダイナマイト事故によって下半身不随になってしまったためだから仕方なし……。

内モンゴルの離婚事情と再婚事情は……？

この映画の面白いところは、夫バートルとの離婚を決意し、裁判所でそれを承認してもらったトゥヤーが再婚に向けて舵を切り替えたところ、かぐや姫伝説のように次々と男たちが求婚に現れること。なぜ離婚に裁判所の承認が必要なのかという法律上の問題点はともかく、ここであなたが抱く疑問は、①なぜ、トゥヤーは夫と離婚するの、②なぜ、トゥヤーはすぐに子連れでの再婚を期待するの、③なぜ、トゥヤーはバートルの面倒を見てくれることを再婚の条件としたの、という3点のはず。

まず①②に対する答えは貧しさ、すなわち生きていくためにはやむをえない選択ということだ。つまり、現状のままではトゥヤーの女手1つで全く働けない夫と2人の子供を養っていくことは不可能だから、夫と離婚し子連れのトゥヤーを養ってくれる再婚相手を探すしかないということだ。すると、きわめて異例な③の条件は、単なるトゥヤーのわがまま、そしてトゥヤーのバートルに対する愛情の表れ……？

たしかにそうなのだが、そんな条件を満たす男がそうそういないことは明らかだから、トゥヤーの再婚は難しい、と私には思えたが……？

本命はボロル……？

この映画は、一方では砂漠化と水不足で苦しむ内モンゴルの人々の苦しさや貧しさという現実を生々しくつきつけるが、トゥヤーの求婚者選びの物語は、ちょっと現実離れしたおとぎ話的な展開にしているところが面白く、それが王全安^{ワン・チュアンアン}監督のひと工夫……？

そもそも、情報に疎い内モンゴルの人々に、なぜトゥヤーが離婚し再婚相手を募集していることがすぐに知れ渡るのか不思議だが、トゥヤーの元には次々と面白そうな

求婚者が……。その面白さは是非スクリーン上で観てほしいが、本命として浮上してきたのは、何といっても元クラスメートで今は石油を掘りあてたため大成功している事業主のボロル。その苦労話や十数年間ずっとトゥヤーのことを思っていたという女性観を聞いていると、たしかにボロルはいい奴。そのうえ一緒に住むことはできないが、バータルはちゃんとした介護施設に入れると約束してくれたから、これ以上の条件は望めず、話はトントン拍子に。

私はそう思っていたが、1人施設に残り、トゥヤーと子供たちそしてボロルと別れを告げたバータルは、その日とんでもない行動を……。

ここらあたりの心理描写と人間模様展開の技は抜群。こういう点が、ベルリン国際映画祭では大いに受けたのかも……？

穴馬は、困った隣人センゲー

他方、この映画には冒頭から隣人のセンゲー（森格）^{センゲー}が登場するが、彼はトラックを買って商売することを夢見ながら、なかなかそれを実現できず、他方で再三嫁に駆け落ちされて悩んでいる、かなり中途半端な男。センゲーは何かとトゥヤーとバータル夫婦に親切だが、自由な男センゲーの行動は神出鬼没……。したがって、彼はストーリー展開の節目節目に登場し、それなりの役割を果たしていく。

後半の大きなポイントは、彼がトゥヤーの土地で井戸を掘りはじめたこと。当初、トゥヤーは迷惑だからやめてくれ、と井戸掘りを拒否したものの、いつの間にかそれに協力していくことに……。しかし、その結果は……？

トゥヤーはボロルと別れ、当初から本命視されていたある男との再婚を決意したが、何とそこに穴馬センゲーが入り込んできたから、急遽話はややこしいことに……。たしかに、センゲーのトゥヤーに対する愛とバータルに対する尊敬の気持は明らかだが、あんな生活力のなさでは……？ さあそんな中、トゥヤーの結婚は……？

印象に残る冒頭シーンとラストシーン

映画の冒頭、内モンゴル特有の冠（帽子？）を被った花嫁衣裳姿のトゥヤーが登場する。しかし、そんなトゥヤーの第一声は、「親父が2人いて何が悪い！」と言いながら男の子ととっ組み合いのケンカをしている息子を見て、「ケンカはおやめ！」と怒鳴り、それでもやめない2人に対して「好きにおし！」と言い放つもの。その直後、



1人ゲルの中に入っていったトゥヤーは嗚咽しながら涙を流すことに……。

さて、これは一体何を意味するの、と思いながらその後のストーリー展開を見ていたが、映画のラストになって再びこの冒頭のシーンが登場する。今無事に再婚を果たし、お祝いの席にバートルもボロルも座っているのだから、トゥヤーは幸せいっぱいのはず。たしかに、「幸せ？ それとも不幸せ？」と尋ねられたら、トゥヤーは「幸せ」と答えるだろうが、それは決して安穩とした幸せではなく、これからさまざまな苦勞と軋轢を伴った幸せのはず。しかし、これだけたくましく、これだけ人間味のあるトゥヤーであれば、自分と再婚相手はもちろん、2人の子供もバートルもそしてセングーさえきっと幸せにしながら生きていこうと思えてくるから、この映画はすごい。

そして、そんな力強くたくましい内モンゴルの女性トゥヤーを見事に演じた余男ユー・ナンもすごい。次回作では是非、日焼けしたたくましい余男ユー・ナンではなく、ピククリするような美しい余男の姿を観たいもの……。

2008(平成20)年1月26日記

マオ・タンチン

毛丹青氏との出会いを大切に！

マオ・タンチン

毛丹青氏は日本在住20年、日本語と中国語の両方で執筆・講演活動を行っている、1962年北京生まれの作家だ。そんな有名作家と中国語版『坂和の中国電影論』の出版について協議しながら楽しく食事したのは、私の行きつけのちゃんこ屋「神鷹」^{かみたか}。この08年3月19日の出会いをセットしてくれたのは、留学生の時から家族ぐるみにつき合っている山西省出身の女性郭小莉だ。当日は折悪しく大雨だったが、私は毛先生らと共にいつものように事務所から自転車で神鷹へ向かった。弁護士が雨の中、ビニール傘をさし自転車を押していく姿が面白かったらしく、彼は本の中にそんな素顔を示す1コマが欲しいと力説した。食事前資料として渡した『シネマ5』と『シネマ17』の目次を見た彼の第一声は「こり

や面白い！ 是非やりましょう！」という心強いものだった。

ヒット作を連発している毛先生の言葉によると、大切なことは第1に出版社選びと翻訳者選び。第2にいかにか売れる仕掛けをするかということだ。そんな彼の提案で実現したのが、4月2日に開催される人気作家蘇童^{スー・トン}を歓迎する座談会への出席だ。この会には中国文学の研究者はもちろん、上海文藝出版グループの社長や月刊誌『旅遊天地』『人と自然』の記者の他、女優の田原^{テイエン・ユエン}さんらも出席すること。毛氏の戦略はそこで『シネマ5』を配布し、弁護士稼業との2足のわらじをはく映画評論家坂和の紹介をすることだ。そして、そんな戦略は見事に大成功！ その詳細はコラム(160頁)を！

2008(平成20)年4月9日



08年4月2日の座談会。左が司会の毛丹青先生、右が蘇童先生